

隠岐島前高等学校（令和3・4年度実践モデル校）

「多様な考え方を受容し、共に学び合うことができる学校」

1、隠岐島前高校の紹介

(1) 海士町は大人も多様

隠岐島前高校は本土からフェリーで3時間、高速船で1時間半ほど離れた隠岐諸島の海士町にある。海士町の人口は約2,200人でそのうちIターンの人が2割程度いる。また「大人の島留学」として多くの県外出身の大人が働いている。

(2) 隠岐島前高校生も多様

隠岐島前高校の生徒数は全校生徒164名に対して、島前地区以外の出身の生徒が110名で3分の2以上が「島外生」である。海外留学生等も含めた生徒の出身地は下表のとおりである。

出身地域	人数(人)
島前地域	55
島根県（島前地域を除く）	14
北海道・東北地方	1
関東地方	37
中部地方	12
近畿地方	29
中国地方（島根県を除く）	9
四国地方	2
九州地方	5
海外	4
合計	168

「しまね留学」として島外からくる生徒に関してはとても人気のある学校で毎年、入試倍率は1.5倍を超え、2倍を超える年もある。学力層や、将来の進路希望、島でやりたいことなども様々で「多様」な生徒が混在している。

教職員も多様で、隠岐島前の魅力を上げるために学校に常駐する5人の魅力化スタッフの他に学校経営に助言をする「学校経営補佐官」や寮の舎監を中心に仕事する「ハウスマスター」がいて、小規模校でありながら、それに関わる教職員の数は多い学校である。

2、実践紹介

(1) 人権が尊重される学習活動づくり

①個に応じた「わかる」学習活動の推進

・習熟度別少人数指導

国語・数学・英語において、1学年50人～60人の生徒を習熟度別に3～4クラスに編成し、個々の学力に応じた指導を実施している。勉強が苦手な生徒も積極的に学習に取り組んでいる。

・授業魅力化プロジェクト

本校の学校教育目標である「学校経営目標」の3本柱の中の一つのプロジェクトである。基礎学力の確実な定着を目標に様々な取り組みを行っている。今年度は特に学習に苦しんでいる生徒に対する支援を行うことで、該当生徒の学力到達ゾーンを1段階上げること重点を置いている。教職員、魅力化スタッフ4名でプロジェクトチームを組み、学習センタースタッフや特別支援教育担当の教員とも連携しながら会議やさまざまな取り組みをおこなっている。

・隠岐国学習センターとの連携

公立塾である学習センターは学校の前の坂を降りたところにあり、勉強や少人数での会議ができるようになってきている。現在全校生徒のうち7割以上の生徒が通塾しており、校内のキャリアプラン検討会に参加してもらい、意見をもらっている。それぞれの生徒の学習や外国の中学校や日本人学校を卒業した生徒の日本語指導なども行っている。

②授業のユニバーサルデザイン化

誰もがわかりやすい授業を実践するために昨年度1年間かけて、全教職員でシラバス作成を行った。作成されたシラバスをもとに今年度は授業を進めている。数学科では定期テストの問題にシラバスのどこの部分を問う問題かが明記され、わかりやすくなっている。さらに年間を通じて「授業力向上研修」をおこなっている。授業のなかで特にどの力を伸ばしたいかを「見える化」するために各教室にマグネットを常設して、毎時間使用するようにしている。また外部から講師を招いて研修や「教科横断型授業」の実践にも取り組んでいる

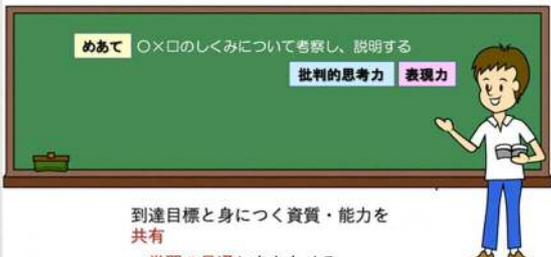
「授業力向上プロジェクト」今年度の取組について

見直されたシラバスを基に、授業の「めあて」と「資質・能力」の明示

めあて ○×のしくみについて考察し、説明する

批判的思考力 表現力

到達目標と身につく資質・能力を共有
→学習の見通しをもたせる



めあて

表現力

弧度法を用いて角度を
表すことができる。

$(A)_{\text{周}} = 2\pi r$

$(A)_{\text{面積}} = \frac{1}{2} r^2 \theta$

$2\pi \times \frac{1}{4}$

$\theta = \pi$



③人権教育（公開授業）

毎学期に必ず人権教育の時間を設けている。人権同和教育課の訪問に合わせて指導・助言をもらいながら進めている。授業は zoom を利用して、保護者にも公開した。教科の授業も学期ごとに公開授業週間を設け、地域の小中学校にも案内している

(2) 安心・安全に学べる環境づくり

①教室掲示の工夫および、環境美化

教室の前部分になるべく物を置かないことで視認性を確保している。また掲示物は項目ごとに分けること、同じようなものはまとめて掲示することで見やすいようにしている。また傘立ても個別に入れることができるものに更新し、環境美化に努めている。



②中学校との情報共有、連携、および生徒情報の共有

一人ずつ出身中学校に連絡して、生徒情報を確認している。内容は特徴や学習状況、人間関係、配慮の必要性の有無など。集めた情報を全教職員で共有し、指導に活かしている。

③特別支援特命 CN の導入。

特性のある生徒に対応するために、令和 2 年度から特別支援特命コーディネーターとして特別支援学校での勤務経験のある教員が着任している。

導入の経緯

平成 31 年度入学生のある生徒（以降、生徒 A さん）は、特別支援学校から本校に進学した。A さんの特徴は以下のとおりである。

自分の障がいの認知はできており、本人が作成した資料をもとに生徒や教員に説明した。一方で、ちょっとした変化にパニックを起こすことがあった。朝起きることができない。感覚過敏で過集中になるため、集中できるときは一心不乱に物事に取り組むが、集中できないときにはまったく活動に取り組むことができなくなる。また、言外の意味の読み取りが苦手であるため、言葉を文字通りに受け取ってしまう。さらに、熱・痛み鈍感であるため、体調が悪くても気づくことが難しい。熱があったとしても自分から体調不良を

訴えることはないため、教員側で注意を払っておく必要がある。

Aさんが入学してから教員が大勢で対応するものの、専門知識がある教員がおらず、対応にかなり苦慮した。専門的に対応できる教員が必要であると同時に、教員が一人ひとり特別支援教育の知識を得るために教員研修が必要だと判断した。令和2年度から特別支援学校から教員が赴任し、特別支援教育特命コーディネーターとして教員研修を進めるとともに、Aさんの対応を考えることとなった。

導入後の取り組み

コーディネーターを中心に、Aさんに対してサポートチームを編成し、複数の教職員で対応に当たった。コーディネーターは主に日々のAさん本人や保護者の要望を聞き、寮生活のサポート、担任のサポート、教員への配慮事項の周知を行った。

コミュニケーションカード、対応マニュアルを作成し、話し方（言葉の選択）を細かく決めて、Aさんがパニックになりにくい環境づくりに努めた。さらに、寮の舎監、ハウスマスターとのかかわりや対応の仕方を一つずつ丁寧に考えていった。教員研修も定期的に行い、障がいの特徴や対応の仕方などを教員同士で話し合う時間を設けた。教員は研修を受けることで、特別支援教育に限らず、すべての生徒にとって学びやすい環境整備に力を入れる人が増えていった。そして学校全体にユニバーサルデザインの理念が広がった。

一人への支援から全体への支援へ

不定期でほとんど開催されていなかった特別支援委員会を月1回定期的に行い、教職員の困り感の共有、支援の進捗状況、生徒情報を共有するようになった。また、職員室での会話や学年会でも生徒の様子を共有する機会が増えた。学習プリント・定期考査作成時の工夫点については、学校全体で取り組む共通事項として以下のことを意識して取り組んだ。特別な支援の必要性の有無に関わらず、すべての生徒に対してわかりやすい指導を心がけている。

【全体の支援】	【個別の支援】
<ul style="list-style-type: none">・試験範囲や長期休暇課題の一覧表・意味の区切れがわかるような文書作成・メモの携帯・文書のフォントの統一・掲示物の配置・具体的で簡潔な指示・ソーシャルスキルトレーニング（ビジョントレーニング、間違い探し、表情の読み取り、写真から一言、気持ちを考える）	<ul style="list-style-type: none">・配布物の拡大・色付きのプリント・授業・試験における合理的な配慮（座席の配慮、試験時間の延長、ルビ打ち、ノイズキャンセリングイヤホンや遮光眼鏡の使用）・前黒板には何も張らない・個別学習への対応・定期面談（担任、副担以外の先生も）・静かな部屋の確保

(3) 多様性を認め合う人間関係づくり

①授業を通しての人間関係づくり

授業を通して様々な人との人間関係づくりができるようにしている。本校が特に力を入れている総合的な探究の時間では生徒同士だけでなく、地域の人との交流にも取り組んでいる。また体育の授業では男女共習を積極的に取り入れている。

②地域との交流

地域との交流を目的に本校に入学した生徒が多いので、自分たちでも積極的に交流しようとしている。個人、寮、学習センターなどで様々なプロジェクトがあり、取り組んでいる。

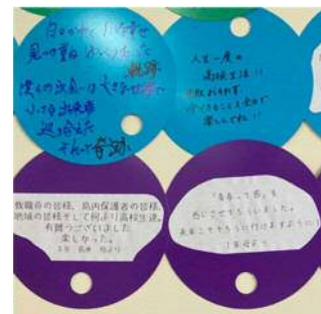


3年生の高橋恭介さんの作った動画。「CreativeAward2021」で銅賞受賞を受賞した。

<https://youtu.be/KLTSagOAwVc>

③人権教育 PTA 活動育成事業

県の指定を受けて活動している。人権教育に関わる講演会を実施している。人権・同和教育の授業を zoom で公開したり、昇降口にメッセージを掲示するなど積極的に活動している。



3、成果と今後の課題

(1) 制服改革

2年前総合的な探究の時間から始まった課題解決プロジェクトがきっかけで制服改革を行った。メディア等でも取り上げられている。本校卒業生の井出上漠さんも中心となって取り組んだ。制服改革が、生徒からそして総合的な探究の時間から出てくるところが隠岐島前高校らしく、また多様な生徒に対応してきた結果だと感じている。

(2) 令和4年度高校魅力化アンケート

以下は、全県を対象に行った、高校魅力化アンケートの結果である。

質問：人と違うことが尊重される雰囲気がある 質問：ありのままの自分が尊重される雰囲気がある

肯定的評価：95.4%

他校との比較 +15.4%

昨年度との比較 +6.9%

肯定的評価：92.1%

他校との比較 +9.9%

昨年度との比較 +7.9%

この2つの質問の結果から本校の生徒は多様性を認められているという実感は高いと感じていると考えられる。いままで取り組んできた活動の成果だと感じている。

その一方で

質問：共同作業だと自分の力が発揮できる

肯定的評価：63.8%

他校との比較 -6.8%

昨年度との比較 -6.7%

この質問の結果から共同的な学びにつなげることができていないというも読み取れる。このことから、共に学び合うための工夫をすることが今後の課題である。

(3) もう一度多様性を考える

もう一度「多様性」を考える

「多様性」。私の通う学校でも大切にされている言葉だ。多様性とは一人一人違うことを認めあい、協力すること。そんなプラスなイメージで、私も大切にしている。

だが、多様性を大切にすることは本当に良いことばかりなのだろうか。私は最近、そう考えるようになった。理由の一つとして、お互いの違いを認めなくてはいけないという思いの強さから、どこか人間らしさが自分から抜けていくように感じるからだ。

「この人がこう言うのも、この人と私の価値観が違うから仕方ない」。一見すてきな考えにも思うが、この考えになったことによって「多様性=何をしても言ってもかまわない」が通用してきてしまったように感じる。

私のようにそれを疑うことをせず認めてしまっている人がたくさんいるはずだ。このことから私は「多様性」はプラスな言葉なのか、マイナスな言葉なのかをもう一度考えてみなくてはいけないなと思った。

令和4年9月11日の山陰中央新報のこだま欄に掲載されたもので、本校2年生の投稿である。

多様性を認められているという感覚はあるが、その中で「なんでもあり」となることには違和感を覚えている。このような感覚を持ってきているということこそが多様な考え方を受容してきた結果だと思った。人権教育に関わってきたものとして、とても嬉しかったのと同時に今後の課題だと感じている。